

ハマ街ビト

横浜には、独自のサービスや技術の強みを生かした魅力的な企業、団体が数多く存在しています。LTR独自の視点で他社の参考になる先駆的な取り組みや、新たな挑戦をする企業とヒトをピックアップ。今回は、経営者にとって必要な「俯瞰的な視点」「志・理念」などを、仏教的な視点からご紹介します。

2022年2月、LTRは複数のお寺のご住職とともに、「経営者の学び × 交流 × 非日常の場としてのお寺」をコンセプトとした「ビジネス交流会 Lカフェ」をスタートさせました。経営者は仕事上の経験を学びとして昇華するだけでなく、仕事以外の場面で経験や、人との出会いを通じて、素養を磨く必要があると思います。それは、会社や地域の未来を灯すための自己鍛錬の場であり、同じ体験をすることで、参加者同士が関係性を深め、新たなコラボレーションにつながるきっかけ作りの場にもなるはずです。

今回のハマ街ビトは、LTRと「ビジネス交流会 Lカフェ」の企画立案・運営に携わってくださっている石田ご住職(南区/久保山光明寺)に人生、そしてビジネスに必要な考え方などを仏教的な視点からお書きいただきました。石田ご住職は、お寺の経営に関する講義なども定期的に行っています。経営理念や志と核となる部分は変えることなく、時流に合わせて事業戦略を見直し、組織を変革してゆく……。分野は異なるものの、共通している部分もあるのではないのでしょうか。そんな石田ご住職によるコラムを、ぜひご一読ください。(司法書士 清水 敏博)

仏教を経営に生かしてみよう

私は寺の住職をしながら、インド仏教の研究者として論文を書き、僧侶の皆さまが地域における寺院のあり方を考えるグループワークの講師を担当することもあります。寺院も一つの法人であり、適切な運営が必要です。また未来に寺院をつなげるためには、檀家さまや地域の方々の協力が不可欠です。

寺院は基本的に檀家さまからの布施、すなわち信頼に基づいて善意で差し出される金銭によって運営されています。ですから、信頼を裏切るようなことをすると、たちまち運営が成り立たなくなります。

これは、どんな仕事にも共通するところでしょう。経営者も自分の利益のためだけに働いていては、お客さまや従業員から見放され、仕事がうまくゆくことはありません。

寺院運営について話すときには、「住職がお寺を残したいと思っても駄目です。お寺に関わるすべての人にこの場所が必要だと思ってもらえるよう、住職は動かないといけません」ということを伝えていきます。そのためには、自分のことよりも、檀家さまをはじめとする他人のために行動する利他の精神が重要になります。



石田一裕 (いしだ・かずひろ)

1981年生まれ。北海道のお寺に生まれ、高校卒業後、元全日本仏教会理事長の白幡憲佑氏に弟子入りし、久保山光明寺にて修行。大正大学大学院仏教学研究科博士課程修了、博士(仏教学)。現在、浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師を務める。僧侶としては、都内寺院での勤務、副住職を経て、2022年より久保山光明寺住職。専門はインド部派仏教研究。著書に『お坊さんはなぜお経を読む?』など。



浄土宗久保山光明寺

横浜市南区庚台にある浄土宗寺院で、明治時代に吉田茂首相の養父である吉田健三が中心になって建てられました。境内には国指定登録有形文化財である書院、また横浜市指定文化財である木造菩薩立像(通常非公開)、木造地藏菩薩坐像(どなたでもお参りできます)などがあります。

これは経営にも共通することで、自分の利益ではなく、自分に関わる他者の利益を第一に考えることが大切です。ここではお寺の活動を振り返り、経営と関わる視点を提供できればと思います。

石碑にみる飲食店成功の理由

久保山光明寺には、面白い石碑が二つあります。一つにはウシが、もう一つにはニワトリやウナギが彫られています。

ウシが彫られた石碑は、横浜開港後に牛鍋が大流行したことにちなみます。そのとき牛鍋店が大繁盛しましたが、他の飲食店から妬まれてしまいます。さらには「牛を食べると良くないことが起る」という噂まで流れはじめました。牛鍋店の店主たちは「これはいけない」と思い、光明寺にウシの供養碑を建てて、その噂の火消しをしたそうです。



ウシの彫刻が目を引き「普濟無窮碑」

これは新しい食文化を根づかせようと努力した当時の人たちが、既存勢力の反対にうまく対応した事例と考えられます。自身が扱う食材をしっかり供養し、それを石碑という形として残し、広く知らせることで、仕事に対する安心感を得たのでしょう。

現在は企業に社会貢献が求められ、また買い手もエシカル消費※(倫理的な消費)を意識します。ウシの供養碑を建てたことは、自分たちがただウシを犠牲にしているのではなく、しっかりと供養していることを世に示す一つの社会貢献活動であり、消費者の安心を確保することにもつながるものです。これが反対勢力への効果的な対応策となり、横浜から牛鍋という食文化が発信されることとなりました。

※地域の活性化や雇用などを含む、人・社会・地域・環境に配慮した消費行動のこと(消費者庁HPより)

利益を忘れる時間もたらすもの

もう一つの石碑は、光明寺の檀信徒の鳥肉店やうなぎ屋、鮮魚店などが、商品となる生きものの慰霊のために建立したものです。今でも店主たちが集ってニワトリやウナギ、魚のための法要が行われ



「食鳥川魚慰霊碑」にはウナギが彫られている

ています。明治時代に行われたウシの供養の志は、形を変えて今日までしっかりと残っています。この法要のとき、私は「二つの命に感謝して商売をすること」「商売をしっかりと営むことは一つの供養であること」をお伝えしています。

二つの命とは「商品となる動物たちの命」と「これまでお店に関わってきた方々の命」です。飲食店は商品となる動物の命と、そのお店に関わってきた人々の命の上に成り立っています。食料として私たちの糧になる命を大切に扱い、お店を立ち上げた今は亡き方々の思いを大事にすることは、良い仕事につながります。そして誇りを持って自分の仕事をすることが、二つの命への供養となります。

今年(2022年)は参加者の方から「年に一回法要をやると、何か身が引き締まります」と感想を頂きました。職場を離れ、心を供養や感謝の念で満たすことは、仕事に対するモチベーションを上げる一助となります。より良い仕事をするためには、直接的な利益を忘れる時間を持つことが必要です。

仏教は自由に楽しく生きるための教えです。ストレスが大きい方、不安や苛立ちを感じやすい方にこそ、仏教は役立ちます。仏さまの教えを参考にして、読者の皆さまがより楽しく仕事をするのであれば、幸いです。(久保山光明寺住職 石田一裕)

さらに詳しい記事が読める
ハマ街ビト番外編は
こちらから→

